

## 2025年度イラン短期研修代替・周辺国理解促進プログラム報告書

龍谷大学国際学部国際文化学科4年

松本 調

私は、10年前にクーデター未遂事件直後のトルコへ渡航したことをきっかけに中東情勢に関心を持つこととなり、現在大学で日本のパレスチナ問題へのかかわりについて研究している。しかし当該問題においてイランというアクターの重要性を感じ、彼らの中東情勢に対する認識を知りたいと考え、本研修に応募した。選考合格後、私は2025年12月1～2、5日のイラン外務省付属国際関係学院（以後SIR）一行との日本国内研修プログラムと、情勢悪化によるイラン渡航中止に伴い、2月2～9日に実施されたオマーン（マスカット）およびカタール（ドーハ）での代替研修に参加した。国内研修ではSIRの学生らのプレゼンテーションを受け、同校学生らとともに在京イラン・イスラーム共和国大使館、日本国外務省や国会議事堂、エネルギー経済研究所などの各種国内の研究機関やミュージアムを訪問した。代替研修においては、カタールにて国営放送アルジャジーラのシンクタンクやスタジオ、メディアインスティテュートを訪問し、アルジャジーラフォーラムに出席したほか、日系企業、ジョージタウン大学カタール校を訪問した。オマーンでは、在オマーン日本国大使館訪問や日系企業との面談を行ったほか、スルタンカーブス大学の大学生らとのプレゼン交流、現地の博物館やスークの見学などを行った。本研修報告では、これらの研修で得た知見や気づきをまとめることとする。

イランと聞くと、親日的、ペルシャ絨毯やイスラーム、そして核問題というイメージが思い浮かぶ。教科書や書籍のみでその世界を知っていた私にとってそれは、知っているようでどこか遠いダイナミックな世界であった。「頭でっかち」になっていたといえるかもしれない。国内研修で交流したSIRの学生たちは私のそんな冷たいイラン観に温度を与えてくれた。年齢の幅は広いが、多くが我々と変わらない年代の学生らであり、同じものを面白いと感じて共有できた。

彼らとは笹川平和財団でのプレゼンテーションの交流から始まった。その後、在京イラン大使館で夕食を共にし、次の日の日本イラン友好議連国会議員らとの面談や国会見学、後日のシンクタンクや外務省訪問時には、彼らは闊達に自らの意見を発言した。日本の国内情勢についても詳しく調べてきており、そのリサーチ力の高さに驚かされた。彼らからは多くのことを学ばせてもらったが、最も尊敬しているのは、彼らが自らの国のことを誇

らしげに話すことである。もちろん、イランが各種課題を抱えていることは、彼ら自身も理解していると思われるが、それでも国が大切であるということを伝える姿に私自身、見習うべきところがあると感じた。

12月5日（金）、「またテヘランで会おう」と約束し解散した。しかし、それをかなえることはできなかった。12月下旬ごろからイラン現地でのデモの情勢は日を重ねるごとに悪化し、外務省の危険渡航情報はレベル4。研修は中止となった。その後、代替研修としてオマーンとカタールでの研修が実施された。

現地での研修を通じて学んだことは、「中東視点の中東」「多様な中東人材が集結するドーハ」「教育大国」に分類できるといえる。

まず、「中東視点の中東」についてである。特にオマーンで見られたことであるが、世界がグローバル市場と化したことで、近代化と自らのアイデンティティをどのようにして両立させることができるのかということ在必死に模索している様子をうかがうことができた。これらの情報や空気感は、現地で実際に話を聞いてみないとわからなかった面であろう。目に見てわかりやすい部分では、町並みにも言えることができる。ヨーロッパや米国に見られるような高層ビルよりも現地特有の白い家をなどが軒を連ねている。また外交政策についても、仲介や全方位外交を展開しているカタールやオマーンは周辺諸国や関係アクターである米国や中国とも比較的友好的な関係を築き、仲介をすることでそのプレゼンスを発揮しているといえる。これは中東域内国家の情勢認識を反映したものであり、まさに中東視点の中東といえる。

次に「多様な中東人材が集結するドーハ」については、アルジャジーラフォーラムで話した人々とのエピソードが印象的であった。そこでは、登壇したアラグチ外相らをはじめとする政治家や研究者らの議論が白熱していた。しかし、さらに深い議論が展開されていたのは、各プログラムの間に行われるランチブレイクやコーヒータイムであった。これは、生で参加している人々の特別な機会であるといえる。そこで出会った人々は、祖国を離れドーハで働くジャーナリストやエンジニア、留学生や外交官らであった。彼らはそれぞれの立場から現在の中東情勢に対する認識と今後のキャリアについて語っていた。また、日本についても質問されることもあり、意見を述べる側として責任感を感じる一方、それに対するリアクションなどを通じて、日本について再発見するきっかけにもなった。とあるレバノン出身の研究者は、中国と日本の中東でのプレゼンスについて、中国とは経済的なつながりを、日本とは歴史的なつながりを重視しているという話を聞き、ある種の

中東の日本に対する本音を垣間見ることとなった。

「教育大国」についてであるが、先述したようにドーハには様々な人材が集まるが、それはカタールが教育や研究にかなり投資をしているということも影響している。カタール・ファウンデーションは学生らに対して、財政的支援を行っていることを、ジョージタウン大学カタール校を訪問した際に聞いた。教育や研究に対する潤沢な投資が行われているという事実は、我が国と比較し、考えさせられるものがあり、人材に対する投資の重要性やカタールの持つ人的資源の将来性について感じる事となった。

以上三点が、本研修で学んだ一番の収穫であったといえる。近代化と自国文化との間で葛藤しつつも将来を見据えた人材や技術に対する投資を行い、オイルマネーのみに頼らない生存戦略を模索しているということと、そこには多くの人々がかわり知恵を出し合いながらパレスチナ問題などの地域情勢に自分たちの力で対応していくのだとする強い信念があることを知り、今後も世界のメインアクターの一つとして発展していくであろうこの中東地域から目を離すことはできない。

この研修はこれから中東地域の研究者としてキャリアを構築していきたい自分にとってとても重要な経験であった。インターネットが発達している今、情勢の分析や現地の映像、ニュース記事はより手軽に手に入るようになっている。しかし、現地でしか感じ取ることのできない空気感や思想、そして、何よりもイランやオマーンの学生たちや現地の人々、現地にいる日本人の方々の声というのは、インターネットやニュースの文字情報や映像の背後にある現実について、より具体的で解像度の高い理解を与えてくれた。専門家の方々の学説はもちろん、情勢に対する「勘」のようなものも参考になると話していた人がいたことを思い出したが、その「勘」こそ、このような中東での豊かな現地経験に裏打ちされたものであると考えると、この研修はその一歩を踏み出すきっかけを与えてくれたといえる。この研修で聞いたこと、経験したことを少しでも今後の研究に活かしていきたい。

最後にこの研修を計画し、現地でも手厚いサポートをくださった笹川平和財団、国内や現地の研修で受け入れてくださった各研究機関や法人、大使館の関係者の方々、新たな気付きを与えてくれ、研修内容をより豊かにしてくれた SIR も含めた他の研修参加学生の方々、アドバイスをくださった研修の諸先輩方に御礼申し上げるとともにこれからも学んだことを共有し、今後とも中東研究を志す仲間として協力関係を継続できればと思う。

**※本文は筆者個人の見解であり、団体の意見を反映したものではありません。**